

# それでも、まだ、すくいきれない...Requiem for a Nun

著者	田村 理香
出版者	法政大学多摩論集編集委員会
雑誌名	法政大学多摩論集
巻	34
ページ	79-95
発行年	2018-03
URL	<a href="http://doi.org/10.15002/00014454">http://doi.org/10.15002/00014454</a>

それでも、まだ、すくいきれない…

## *Requiem for a Nun*

田村理香

William Faulkner の *Requiem for a Nun* (1951) は、同じ作者の *Sanctuary* (1931) の続編として読まれることが多い。*Sanctuary* において、女子大生 Temple Drake は殺人事件の証人に立つが、それにより、彼女の異常な性的体験が白日の下にさらされていく。*Sanctuary* から 20 年後に出版された *Requiem for a Nun* が扱うのは、この出来事から 8 年後のことである。Temple は二人の子どもを持つ人妻となっているが、彼女の赤ん坊が殺されたことをきっかけに、8 年前の彼女の体験にふたたび光が当てられていく。同じ登場人物が主軸に据えられていること、その彼女がふたたび殺人事件に巻き込まれていること、そこから彼女の過去がふたたび語られていくことなど、明らかに *Requiem* には *Sanctuary* からの連続性が見られる。ただし、その連続性はストーリーのレベルに限られる。作品としての *Requiem* には、むしろその連続性に疑問を差しはさむような姿勢が貫かれている。*Requiem* では、語られる事実以上に、その事実の語られ方にさまざまな工夫が凝らされており、それらが、*Sanctuary* で描かれたことがらを相対化し、批判するような効果をもたらしているのである。さらに、*Sanctuary* との連続性を持つ *Requiem* 自らも相対化し、自らも批判の対象とすることにもなっている。*Requiem* に内在する批評性とはどのようなものか。考察していきたい。

### I .

William Faulkner の作品の中で、Temple Drake ほどプライベートがさらされた登場人物はおそらくいないだろう。*Sanctuary* において、17 歳の Temple Drake に起こった異常なレイプとその後の売春宿での監禁という過酷な出来事は、Temple が殺人事件の裁判で証人として呼ばれたことで人々の好奇的となる。レイプや売春宿

といったタームと上流階級の女子大生という組合せは人々の興味をそそり、Temple Drake はだれもが知る名前となっていく。それは *Sanctuary* というテキスト内にとどまらない。テキストの外においても、たとえば批評家たちの中にも、Temple に対する批判的な見方をする者は多く、彼らは、彼女が経験した残酷な出来事は自ら招き寄せたものであり、身から出たさびであるといった論を展開している。こうした読みに拍車をかけたのが、Diane Roberts が指摘する通り、*Sanctuary* の 20 年後に同じ作者が出版した *Requiem for a Nun* である——「*Requiem for a Nun* の中で、Temple Drake は、レイプされ、売春宿に監禁されたことを、そして何よりも驚くべきことに、暴力によって開花させられたセクシュアリティを享受していたという『罪』を『告白』している——『だって Temple Drake はいけないこと (evil) が好きだったんですから』と」(Roberts 124)。Temple のこの言葉によって Temple 批判の多くがお墨付きを得たといった流れになったわけだが、作者 Faulkner はそのようなことを意図して、あるいはそうなることを予測して、*Requiem* を書いたのだろうか。というのも、Temple の「告白」については注意しなければならない点がいくつかあるからである。

まず気づくのが、この「罪の告白」は Temple が自発的に行ったものではなく、Gavin Stevens に追及された果てに行われたということである。その Gavin について語り手は、皮肉たっぷりこう紹介している：「彼は弁護士というよりは詩人のように見えるし、実際のところ、彼はそういう人物である」、「真実よりも正義のために、もしくは自分が正義だと思っているもののために戦う闘士である」(43)。Gavin に対する語り手の不信感は一からさまである。

Gavin への違和感は、*Requiem* の登場人物たちの中にも見られる。Gavin は Temple の夫 Gowan の叔父であるが、甥夫婦の赤ん坊を殺した黒人家政婦 Nancy の弁護人を自ら買って出る。甥の娘を殺した黒人女性の弁護を自ら進んで請け負うという Gavin の行動は、Temple 夫妻にとってはもちろん、町の人々にとっても不可解である。Nancy が収監されている監獄の看守も次のように言っている：「黒人ほの殺人者を弁護することだって考えられないのに、もっと考えられないのは、自分の姪を殺した…」<sup>1</sup> (228)。

Gavin が、正義のためには血縁など歯牙にもかけず、黒人女性の弁護を自ら買って出るという、当時の南部では稀な正義感に満ち溢れる白人人権派弁護士かとい

えば、彼はそのような人物ではない。Gavin は弁護する Nancy のことを理解していないし、理解するつもりもない。それは、Gavin と Nancy が交わすかみ合わない会話からも明らかである。Gavin が、弁護している Nancy を一人の人間としてとらえていないことは、周囲の人たちも気づいている。たとえば看守は Nancy のことを話すときに“Nancy” と言いつけるが、会話の相手が Gavin であることを思い出すと、「あの囚人」“the prisoner” と言いつ換えている (227)。Gavin にとって Nancy は、名を持つ一人の個人というより制度上の名称でとらえるだけの存在である。

Gavin はいったい何を求めて、Nancy の弁護人になったのであろうか。それは、Temple から話を聞き出すための道具として Nancy に利用価値があるからである。もし Nancy の命を救うために、あるいは厳正な裁判を行うために Temple の「告白」が必要であるならば、Gavin はそれを Nancy の死刑が確定するずっと以前に求めるはずである。ところが彼が Temple の「告白」を聞き出そうとするのは、Nancy の死刑が確定した直後である。あたかも Nancy の死刑判決がゴーサインであるかのように、死刑判決が下された法廷から、その足で、同じく法廷から戻ったばかりの Temple の家に押しかけている。

このような異例かつ不可解な行動を取ってまで、Gavin が Temple から聞き出したいものとは、いったい何なのであろうか。Gavin 自身によれば、彼が求めているのは真実である。しかしその「真実」とは、8年前 Temple が売春宿に監禁されているときに Popeye からあてがわれた Red との情事のことであり、Noel Polk が指摘するように、「真実ではなく事実」である (Polk 89)。Gavin は、その出来事から8年後に起こった赤ん坊の死も Nancy の罪も、原因のすべてをその「事実」に帰して、「過去は決して死なない。それは過去ですらない」と言っている (80)。Noel Polk は、Gavin の Temple の追及を「抽象的な概念のむなし追求」と呼ぶ Michael Millgate の見解を踏まえて、Gavin が「そのような行為を行うことに対する、そして彼の『過去へのオブセッション』に対する激しい批判」こそが作者 Faulkner の *Requiem* における主たる意図であると述べる (Polk 89)。

ここで注目すべきは、Gavin が特定の過去を選んでいるということである。Temple の赤ん坊の殺害の原因を過去に求めるのであれば、赤ん坊は Nancy に殺されたのだから、いわくつきの「ヤク中の黒んぼの淫売」Nancy を Temple 夫妻が雇っ

たという過去に原因を帰すべきである。しかし Gavin は、それ以前の過去もそれ以後の過去もすべて無視して、Temple の 25 年間の人生の中からわざわざこの時点を選び出している。なぜなら、そこに性が絡んでいるからである。その意味で、Gavin の言う「過去は決して死なない。それは過去ですらない」(80) は、同じ作者 Faulkner の *The Sound and the Fury* で Jason Compson が言う「メス犬はずっとメス犬さ」“Once a bitch always a bitch” と同一の思考に基づいた言葉であるといえよう(180)。細々と雑貨屋を営む、没落した名家の末裔 Jason Compson が述べる言葉と、知性やモラルを象徴する職業に就く Gavin Stevens は、南部家父長主義的なイデオロギーを別の言葉で表現しているにすぎない。

Gavin Stevens が求めているのは、ふしだらな女子大生のまだ語られていないセクシャルな秘密である。*Sanctuary* で暴かれ、多くの人に共有されてきた Temple Drake 物語のさらに面白くてショッキングな続編を本人の口から聞くこと、それが Gavin の目的である。そのために彼は、真実の追求という美しい名目を掲げ、Temple に立ち向かっている。したがって、この Gavin の追及が、*Sanctuary* で殺人事件の証人として Temple が呼ばれた裁判に似たものとなるのは想像に難くない。

*Sanctuary* で地方検事の Eustace Graham は、婦人科医に証言を行わせ、女性性“womanhood”という「人間の生におけるもっとも神聖なるものなかでもっとも神聖に扱われるもの」を犯した物的証拠として Popeye が Temple に使ったとうもろこしの穂軸を厳かに掲げた。とうもろこしの穂軸や婦人科医の証言は実は殺人事件とは直接の関係はない。それらが持ち出されたのは、陪審員の男たちに向かって、彼らの目の前にいる女性に対してアブノーマルな性行為が実際に行われ、それによりこの女性が確実に処女を失ったという、その一部始終を事細かに彼らに伝え、そのときの情景を想像させるためである。証拠物件や証言というツールを使って、この法廷の「男たち」——gentlemen と呼ばれている——はなかなかお目にかかることのできないレイプを体験する。それをカモフラージュするために女性性という、これまた殺人事件とは無関係なタームも持ち込まれる。対象の女性は、その顔を見た男が「おれだったらとうもろこしなんか使わないぜ」と言うような上玉であり、彼女はすでに神聖なる女性性を犯されているから、心置きなく苛み、弄ぶことができる (*Sanctuary* 294)。こうして男たち——gentlemen と呼ばれている——の興奮を十分高めたのち、ユースタスは、すっかり裸にした女性に

素性を明かすよう迫る。「お名前は?」、「もっと大きな声で」、「はっきり言ってください。だれもあなたを傷つけるようなことはしませんから。ここにいらっしゃる方々、一家の父であり夫である人たちに、知っていることをきちんと伝えて、あなたの悪いところを正してもらおうではありませんか」(*Sanctuary* 284-85)。

地方検事 Eustace は、下卑た欲望に身を任せている陪審員たちがそのことに気づいて恥じる前に、彼らに「一家の父であり夫である立派な男たち」という称号を与えることを忘れない。家父長主義的なイデオロギーを盾に父や夫という安全地帯に逃げ込ませた上で、彼らの振る舞いをこんな論理で正当化している——もしも女性性から外れた女性がいたら、そんな悪い女性は正さなければいけないし、正すためには彼女のみだらな行為を吟味しなければいけない。なぜなら「一家の父であり夫である立派な人たち」には女性というものを庇護し、そのセクシャリティを管理する義務があるのだから (*Sanctuary* 285)。Eustace が正当化を行えるのは、共同体におけるこうした共通認識が前提としてあるからであり、Temple も含めて、彼らがこのような家父長主義的なイデオロギーを共有していることを熟知しているからである。<sup>2</sup>

こうして *Sanctuary* の地方検事 Eustace Graham は裁判に勝利するが、*Requiem* の Gavin Stevens の追及はあたかもこの裁判をなぞっているかのようである。*Sanctuary* における殺人事件で「裁かれた」のは、被告の Lee Goodman ではなく証人として呼ばれたレイプの被害者 Temple Drake だったが、*Requiem* の Gavin も、「裁く」対象を殺人を犯した Nancy ではなく、娘を殺された被害者 Temple と定めている。Gavin は、死刑判決を受けた Nancy の助命嘆願を行うという口実をもって州知事の公邸に Temple を連れて行くが、彼の追及の舞台となるのは、法廷でこそないものの、「天秤を手にした正義の女神の図」がかかる、法廷のイメージを喚起させる空間である (98)。Eustace が女性性という本来の裁判とは無関係な大義名分を掲げたように、Gavin も、それに劣らず無関係な大義名分「真実」を掲げ、陪審員ならぬ州知事に訴えかける。

ここでの Gavin は、すでに Temple の秘密を握っており、彼女に対して圧倒的に優位な立場にいる。Temple が8年前の事件について州知事に語るのを、高みから聞いていればいいだけである。ところが彼は Temple が語る物語に介入し、彼女の情事を自分好みに演出して語る。彼が焦点を当てるのは、*Sanctuary* の地方検事

Eustace 同様、アブノーマルな性行為である。Eustace はとうもろこしの穂じくを持ち出して「町の紳士たち」である陪審員たちにレイプ場面を想像させたが、Gavin は、この8年前の事件を持ち出し、不能の Popeye が Temple と Red の性行為を凝視している情景を州知事に想像させようとする。<sup>3</sup>

ところが、このやり方は州知事には通用しない。かつて *Sanctuary* で Eustace が陪審員たちに行ったように、Gavin がいくら性的な想像を掻き立てようとしても、州知事はそれには乗ってこないのである。

州知事：……つまり、その…Vitelli (Popeye) という男も部屋にいたということかね？

Gavin Stevens：そうです。それがヤツがあつた男を連れ込んだ理由です。これでわたしが審美家でグルメだと言った理由がおわかりでしょう。

州知事：靴で踏み潰されるべき男だという意味もわかったよ。でももうその男は死んでいるんだ。きみだってそんなことはわかっているじゃないか。(128-29)

州知事の反応はあくまでも冷静である。彼は、「天秤を手にした正義の女神の図」がかかる、公正や正義を象徴する部屋で、高い背もたれのある王座のような重厚な椅子の前に立っている (98)。王を思わせる権威を持った州知事はまた、「若くもなければ年寄りでもない。特定の人物というよりは、だれかの頭に浮かぶイメージ、神ではなくおそらく天使ガブリエルのイメージ」を持つ、年齢や性別で括ることのできない存在である (98)。男性のセクシャリティに訴えかける作戦は *Sanctuary* の陪審員たちには効果を発揮したが、*Requiem* においては、ここでの権威者である州知事の公平性、象徴性、中性性によって跳ね返されている。*Sanctuary* でハーモニーを奏でた男性のセクシャリティは空虚に漂うばかりである。

*Requiem* における知事公邸の舞台設定はまた、カトリック教会の告解の場もイメージさせる。告解では、信者が神父に罪を告白し、神へ赦しを乞うが、Temple、Gavin、州知事の3人をこのそれぞれに当てはめることは可能であろう。Temple の「ただ静かに聞いてくれる人がほしかった…それは2千年前からカトリック教会が



やろうとしてきて、果たせないでいることだけれど」という発言もそのイメージを強めている (137)。

そして Temple にとっては、カトリック教会と同じように、この場も心の安らぎを与える場ではない。ここでの神父に相当する Gavin は話を静かに聞いて彼女を受け入れるどころか、自分の都合で彼女を追い詰めるばかりである。しかし、この舞台設定によって「神父」Gavin の欺瞞性は一層あらわにもなっている。告解で信者が打ち明ける秘密には性的なことが含まれることも少なからずあり、告解は、神父が禁じられたセクシャルな楽しみに浸る場としてしばしば小説の題材になっている。たとえば、ジョルジュ・バタイユの『眼球譚』では、神父が少女シモヌの告白を聞きながら性的興奮に身をゆだねる場面があるが、*Requiem* の「神父」Gavin も、Temple の 8 年前の経験聞きながら倒錯した性を味わっている。ただし、神父の欺瞞性が暴かれる、その方法には大きな違いがある。『眼球譚』では、シモヌが次のように喝破する。

(シモヌ)「神父さま。あたしはまだ一番罪深いことを申し上げておりません」……「一番罪深いのは、神父さま、あなたとお話しながら指でいたずらしていることです」……。／……。 「そのなかで、なにをしてらっしゃるの？ あんたも、せんずりをかいてるの？」だが懺悔聴聞僧は黙り続けていた。

「じゃ、開けて見てやる！」……。彼女は黒い汚い僧衣の裾を捲り上げると、真っ赤に硬直した長いさおを引きずり出した。」(バタイユ 115-116)

登場人物が直接的に神の僕の優位性を逆転させ権威を踏みにじる『眼球譚』とは違って、*Requiem* における「神父」Gavin の欺瞞はきわめて間接的な形で暴かれる。『眼球譚』のシモヌの言葉に相当するのは、*Requiem* においては、語り手の姿勢であり、舞台設定であり、州知事を始めとする、Gavin に対するほかの登場人物たちの冷静な反応といったものである。これらによって、Gavin の熱中ぶりが際立ち、その欺瞞性があらわになる。彼が Temple に向かって言う「必要なのは真実だけだ」というそんなときに、ぬくぬくと惨めで卑しいオルガズムに浸っていると「は、Temple についてではなく、自分自身についてのあまりにも正直な感情の吐露に聞こえてしまう (125)。



*Sanctuary* の地方検事 Eustace は扇情的な語り口で陪審員の性的好奇心を煽り、彼らを取り込むことに成功した。そこでは、陪審員たちが共通のセクシュアリティを持ち、それが共同体の規範として裁判の前提ともなっていたからである。一方、*Requiem* ではそのセクシャリティは Gavin Stevens 一人に集約されており、その彼の優位性や権威や正当性はことごとく失墜させられている。*Sanctuary* で猛威を振るった男性セクシャリティやそれに基づいた家父長的な共同体の規範は、*Requiem* では距離を置かれ、冷静に吟味されるよう提示されている。

すでに述べたように、*Sanctuary* の Temple に対する非難は *Sanctuary* という作品内の登場人物たちだけでなく、読者からも起こり続けてきた。Temple の「だって Temple Drake はいけないこと (evil) が好きだったんですから」(117) に象徴される「フォークナー作品に表れる『いけないこと』(evil) という言葉が、女性のセクシュアリティを遠まわしに表わす語として読まれてきた」(Roberts 124) わけである。しかし、ここまで見てきたことを踏まえれば、Temple のこの言葉は、むしろ、そのような「告白」を行わせる男性セクシャリティのいびつさを前景化するものとして受け取るべきではないだろうか。この「告白」を字義通り受け取る向きがあるとすれば、それは *Requiem* の Gavin Stevens や *Sanctuary* の陪審員たちのメンタリティをもって読んでいるからではないだろうか。*Requiem* という作品は、そのようなメンタリティに寄り添ってはいない。疑問を呈し、批判している。だとすれば、そのように読む読者の中にはびこる価値観——意識的であれ無意識であれ——に対しても、*Requiem* は批判を促しているといえるのではないだろうか。*Requiem* が *Sanctuary* の出版から 20 年という歳月を経て出版された理由の一つを、ここに求めることもできるかもしれない。

## Ⅱ.

男性のセクシャリティ、そしてそれを基盤とした家父長的イデオロギーに対する批判を、作品として *Requiem* は行っているが、女性登場人物たちもその一翼を担っている。Kelly Lynch Reames は、*Requiem* の女性の登場人物は、共同体の規範や文化の中で権力を持つ者たち（つまり男たち）から自分たちの物語を取り戻す方法として、それぞれがそれぞれの社会的立場によって異なった戦略を取ってい

ると述べる (Reames 128)。黒人女性 Nancy とは異なり、白人女性 Temple には多くの選択肢がある。彼女は、その場において最善と思われる、臨機応変な対応をさまざまな場面で見せている。

当初 Gavin の追及の意図がわからないでいた Temple は、「淫売に子どもを殺された悲劇の母親」の姿を前面に押し出して彼の追及に対峙しようとする。しかし、追及される過程で、彼が聞きたいのは子どもを殺された Gowan Stevens 夫人の話ではなく、スキャンダラスな若い女性 Temple Drake の告白であると悟ると、“Because I liked evil.” (「だってわたしはいけないことが好きだったんですから」) という一人称ではなく、“Because Temple Drake liked evil.” (「だって Temple Drake はいけないことが好きだったんですから」) と三人称で語り始める (117)。よりドラマティックでセクシャルに響く三人称の語りは、まさに彼の趣向に沿ったものである。<sup>4</sup> Gavin が家に押しかけ、ハンカチを押し付けてきたときには、ヒステリカルに叫んで抵抗している。女は泣くものだという Gavin の期待を踏まえた、感情的な反応である (49)。<sup>5</sup>

*Sanctuary* において共同体の男たちの暴力的な論理を身をもって知らされたからだろうか、*Requiem* の Temple は彼らの思考や言語を十分理解し、それを手玉に取ってみせることのできる女性となっている。Gavin に州知事の公邸に連れて行かれたときも Temple は州知事にこう自己紹介している。「わたくし、Gowan Stevens 夫人として伺ったわけではありませんのよ。Temple Drake としてですの。メンフィスの売春宿からミシシッピ州の社交界にデビューした女性です。8年ほど前のこと、覚えてらして？」(101)。州知事もまた、彼女のセクシュアリティに興味津々の共同体の男の一人にすぎないのだろうと予測してのことである。もっともその予測はよい意味で裏切られるのだが。

*Requiem* の Temple は、もはや *Sanctuary* の Temple ではない。*Sanctuary* の Temple は「わたしの父は判事なのよ」“My father’s a judge.” (*Sanctuary*, 30) という口真似で彼女を示すことがわかるほど、家父長主義的なイデオロギーに染まっていた。そんな彼女が口にするのは型通りの言葉だった。しかし、いまや Temple は自らの言葉を持ち、その言葉によって、彼女をコントロールしようとする男たちをかわすことのできる人物となっている。男たちが打ち立て、彼女を蹂躪してきた Temple Drake 像についても、自らその役回りを演じるという逆手を取って打ち壊そうとし

ている。そして、そんな彼女が新たな Temple Drake 物語へと書き換えるのを、*Requiem* という作品は大きな枠組みからもサポートしている。

*Requiem* は三幕の戯曲で構成されているが、それぞれの幕には長い序文が置かれている。ここで語られるのはストーリーの舞台である南部の町の歴史で、「コミュニティを主眼に置いた歴史家が」(Ruppersburg 390)、「客観的な姿勢で、ストーリーとは距離を置いて」(Ruppersburg 393)語っている。この序文とストーリーの並列が、Temple の言動を非常に遠回しに陰から支えているのである。

たとえば、第二幕では「偶然」“coincidence”という言葉によって、本幕と序文が次のようにつながっている。Gavin は、最初の場当たりの追及に失敗するが、カリフォルニアにいる Temple に電報を送り、1週間後に迫った Nancy の処刑後の身の振り方を尋ねる。Temple はその電報を携えて処刑の2日前に Jefferson へ戻るが、そこで彼女が持ち出すのは偶然の一致 “coincidence” という言葉である。これは、Gavin の電報の文面 “But where will you go then?” (67) が息子 Bucky の質問 “Where will we go then, mamma?” (68) と同じであったという偶然を指している。それとともに、Noel Polk が指摘するように、Jefferson の町の名前の由来が偶然によるものだったという第二幕の序文で語られるエピソードの一つとの重なりも読者には感じさせる (Polk 92)。序文のこのエピソードであらわになるのは、町の名前という重要なことがらがいかに偶然にいかげんに決められ、いかにそれが町の歴史となっていくかということである。序文を読んでいる読者は、このエピソードを踏まえて、Temple の偶然という言葉を書く。すなわち、この社会は男たちが偶然や妥協を積み重ねてできた歴史の上に成り立っている。ならば、女性である Temple も同様の方法を自ら使っていけばいい。Temple の言葉にするとすれば、「歴史 history——彼の物語 = 男性の物語——がそうであるならば、女性であるわたくし Temple も適当に折り合いをつけていきます」。そうした皮肉までもを含んで、Temple の言葉は読者に伝わる。しかし対話の相手である Gavin には、そのような意味は伝わらない。彼はストーリー内の登場人物であるから、序文のエピソードを知りえない。したがって、そこからメタレベルの意味へとつなげることはできない。こうして読者は、Gavin がストーリー内の人物であることを再確認し、彼が *Requiem* の大きな言説からはじき出されているという印象を与えられる。いくら Temple Drake 物語を自分好みに作り上げようとしても、*Requiem* の言説から疎外さ

れている Gavin には、*Requiem* という作品全体を支配することはできない。そして、彼が *Sanctuary* の男たちのセクシャリティやそれに基づくイデオロギーを象徴する人物であることを考えれば、そのような価値観が *Requiem* という作品を支配することは不可能である。もちろん Temple も Gavin 同様、ストーリー内の人物であるから、彼女の発言は序文を踏まえているわけではない。しかし序文を読んだ読者にとっては、彼女の言葉は偶然にも町の歴史のエピソードに重なり合う。*Requiem* は、作品の構造を使って、読者までも動員し、Temple の言動を支えているのである。

さらに注意すべきは、各幕の序文が扱っているのが「歴史上のある一つの「期間」ではなく、ある社会秩序から別の異なる秩序を持つ社会への移行」であるという点である (Moreland 195)。Temple は、*Sanctuary* において男性主義的イデオロギーの犠牲となり、そのイデオロギーが作り上げた Temple Drake 像を背負って生きてきた。それは、みながそのイデオロギーを揺るぎない規範として共有していたからである。しかし序文で語られる町のエピソードにおいて、価値観は、揺るぎないどころか、流動し続けている。歴史はスタティックなものではないし、したがって、その過程で生まれた価値観もけっして堅牢なものでもなければ、永遠のものでもない。序文の語り手は、これからも人々の価値観は移り変わり、社会もまた変わっていくという姿勢をもって語っている。*Sanctuary* で大手を振った家父長的イデオロギーは、*Requiem* においては永続性という点においても疑問を突き付けられている。

### Ⅲ .

Temple は *Requiem* という作品の内外から、いわば手厚いサポートを受けていたが、*Requiem* の主たる女性登場人物のもう一人 Nancy についてはどうであろうか。黒人女性 Nancy は、Temple とは比較にならないほど周囲によって人生を蹂躪されている。すでに述べたように、Gavin が Nancy の弁護人になったのは、Nancy の命を救うためでもなければ、命を奪うためでもない。彼女の殺人事件を利用して Temple を追及し、自分の欲望を満たすためである。Nancy はその道具にすぎない。彼女の命について彼は興味すら持っていない。そもそも白人男性が「黒人ぼの殺人者を弁護する」のは、Nancy が収監された監獄の看守が言うように、ありえな

いことであり、黒人女性の生命に対する意識のあるなしは Gavin 個人の人間性とも関連はない (228)。自分の罪とは別のところで、自分とは関係のないことのために、自分の人生に首を突っ込まれ、自分の人生を引っ掻き回されている——Nancy がこのような、いわば、無視されながら干渉されるという人生をこれまでずっと送ってきたことは、彼女と Gavin の次のような会話からもうかがえる。

Gavin: 世界の救済が人間の苦悩にあると言うのだね？

Nancy: そうです。

Gavin: どういうことかね？

Nancy: よくわからない。けれど、たぶん、みんなが苦しんでいれば、だれもお互いのことに首を突っ込んで引っ掻き回すような暇がないから。  
(237)

Nancy の言わんとすることは、人のことを考える余裕もないくらい没頭するものがあれば人は他人に干渉しないということだが、その没頭する対象を彼女は苦悩としている。没頭する対象はなんでもいいはずだが、それを楽しみや喜びでなく、苦悩としているのは、それが彼女の知る人生のすべてだからである。

Temple も人々に干渉され、自分の人生を引っ掻き回されている人物だが、すでに見てきたように、彼女は現状と折り合いをつけることで事態を打開する可能性を見出した。それができるのは、彼女が白人だからであり、白人男性たちが作り上げた社会の一員だからである。一方 Nancy は、女性であるほかに黒人でもある。彼女は、南部社会に生きているものの、その社会には含まれていない。Temple のように社会と折り合いをつけることはおろか、妥協点を模索することすら端から無理である。そのような状況にありながらも、藤平育子が述べるように、「Nancy は 2 千年間の家父長的な組織や法制度へ挑戦している」(Fujihira, 252)。Nancy は言う——「ジーザスだって男だ。……」(235)、「あたしはジーザスにもひれ伏せる。神にだってひれ伏せる」(234)。社会は男たちによって作られてきたという認識は Temple と共通している。Temple の挑戦も Nancy のそれも、ともに妥協の可能性と呼んだほうがふさわしいようなものであるが、Temple がその対象を自らが一員である社会としているのに対し、Nancy は彼女にとっての世界全体を視野に入れて

いる。

Nancy は、彼女の生きる社会の根幹にキリスト教を見る。そして、この社会を支配しているのは男たちなのだから、当然キリスト教も男が支配していると考える。であれば、自分を利用するばかりのわずらわしい社会を生き抜くには、人間の男たちに行くように、キリストや神という男にひれ伏すしかない。「挑戦」が「ひれ伏すこと」なのは、それが黒人女性に与えられた唯一の選択肢だからである。彼女のこの意思表示は、逆に言えば、彼女は、過去もいまも、男たちに対して、そうしていないということである。そして男たちの拠り所とする規範や制度に対しても、そうしていないということである。

このような確固たる姿勢を貫く Nancy が、Temple にとって何よりも強い支えであったことは疑うべくもない。*Sanctuary* での口癖「わたしの父は判事なのよ」が象徴するように、Temple は父的なもの——秩序や権威——に常に依存しており、売春宿でも Popeye を Daddy と呼んでいたほどである (*Sanctuary* 236 他)。*Requiem* においても、Temple は寄りかかることのできるものを求めている。州知事の公邸での「ただ静かに聞いてくれる人がほしかった…それは2千年前からカトリック教会がやろうとしてきて、果たせないでいることだけれど」という言葉についてはすでに触れた通りである (137)。

頼るべきものが不可欠な Temple にとって、Nancy こそが「父」であったことは、Nancy の死刑を前にしてうろたえる姿からも明かである。Temple は Nancy に自分の赤ん坊を殺されているが、Nancy に恨みを抱くどころか、Nancy を失うことのほうを恐れている。死んでいく Nancy に「わたしはどうなるの？」とすがる Temple には「父」なる Nancy のいない人生など考えられない。<sup>6</sup> Temple の不安を受けて Nancy が返す言葉は“Trust in Him”である (236)。Nancy がここで言う“Him”とはいったい何なのであろうか。キリスト教における神、彼女がひれ伏すことができると言っている“Him”のことなのだろうか。

おそらく Nancy は、ほかの多くの人々と同様に、究極的に信じることのできるものをあらかず語を“Him”以外に持っていない。彼女は、Temple をわずらわせてきたものが世の男たちであり、彼らが打ち立て維持し続ける価値観や制度や権威であることを知っている。しかし、いまや Temple にとって、それらは疑うことのできる対象であり、妥協し折り合いをつけることが可能な対象である。その一つ



の例が教会であり、Temple 自身、教会が人と神との間を介在するものでありながら、その機能を果たしていないことをぼやいている。Nancy は、そのような介在する組織や制度に頼るのではなく、そのおおもとである“Him”を信じなさいと言っている。そうしたものに邪魔されずに直接対話することのできる何ものかを自らの中に持つこと、“Him”に象徴されるような揺るぎない何かを自分の中に据えることを Nancy は Temple に提案している。

ところが Temple は戸惑うばかりである：「神を信じなさいって。神がわたしにした仕打ちはどうなの。まあそれは仕方がないのかも。自業自得なのかもしれないけれど。でも、神様を批判したり神様に命令したり、少なくともわたしはそんなことはしていない。でも、神があなたにやったことはどう説明するの。それでもあなたはまだそんなことを言うのね。なぜ？ なぜなの？ ほかに何もないからなの？」(236) Temple にとっての“Him”とは、究極的な「父」といえるかもしれない。よい「娘」ではなかったかもしれないが、彼に逆らうことはなかった、それなのにひどいじゃないの、と裏切られたように彼女は感じている。彼女はここでも求めるばかりである。そんな Temple には、Nancy が提案するような、自分自身の中に核を持って生きることなど、土台無理な話である。Nancy は“Believe”と繰り返し、その真意は Temple に伝わらないまま、舞台は幕を閉じる (243)。

Temple は Nancy なしでやっていく人生を想像することができないほど、彼女に頼り切っている。しかし、それは自分の都合による一方的なものであり、Temple が Nancy の人生そのものに思いを致すことはない。Temple の意識にあるのは、求めることばかりである。Temple に Nancy が不可欠なのは、Nancy が自分にとって必要だからである。それは Gavin の Nancy に対する姿勢とも通底してはいないだろう。

Nancy に対するこのような姿勢は、Temple や Gavin など登場人物たちだけにとどまらない。物語のレベルにおいても、Nancy は無視されながら利用されている。Nancy は赤ん坊を殺した当の本人であるが、彼女の罪が問題になることもなければ、彼女の苦悩が描き出されることもない。彼女の殺人事件は、彼女とは別のところで使われ、彼女のものではなくなっている。彼女の死も、未来におびえる Temple を描くのに使われることに費やされ、彼女の死そのものとしては扱われない。Nancy は自分の罪においても自分が起こした事件においても、自分の死にお



いてすら、当事者にはなりえていない。

さらに *Requiem* という作品においても Nancy は見放されている。Temple が作品の構成や舞台設定、語り手などから全面的にバックアップされていることはすでに述べた。しかし Nancy については、そのようなものは一切見られない。*Requiem* は彼女に対しては無言を決め込んでいる。これはいったいどういうことなのであろうか。作者 Faulkner もまた、登場人物たちのように Nancy を捉えていたということだろうか。そうでないことは、Nancy に、Temple が行った社会に対する挑戦を超えるより大きな枠組みへの挑戦を行わせていることから明らかである。Faulkner が Nancy を支えることができなかつた最大の理由は、*Requiem* が Temple を *Sanctuary* の窮状から救い出すことを第一の目的にしていたためだろう。Temple を苦しめてきたのは、共同体の価値観である。その彼女のために、*Requiem* はさまざまな方法で共同体の価値観の問題点を指摘し、批判している。しかしそれが逆に、Nancy を救われざる者にしてしまった。Temple は南部共同体の一員である。彼女を救うために、共同体の価値観に焦点を当てることは極めてまっとうで効果的な方法である。しかし黒人である Nancy はこの共同体のパーツではあるが一員ではない。白人女性についての共同体の価値観がフォーカスされればされるほど、非難されればされるほど、共同体に属していない Nancy は *Requiem* の言説から遠ざかっていく。結果的に彼女は *Requiem* の周縁で、プロットのための道具立てに留まることになる。

ここにあるのは、「与える」のみであり、「得る」ことのない南部に生きる黒人女性の姿である。Faulkner は悲劇的な人生を送らざるを得なかつた Nancy に “nun” という言葉をたむけたと述べている。<sup>7</sup> Sister でなく nun なのは、カトリック教会の告解の暗喩だけではないだろう。Sisterhood とは相互的な関係をも意味する。一方的に求めるだけで与えることのなかつた Temple、Temple を追及するためだけに利用した Gavin、そしてプロットのためだけに Nancy に殺人を犯させ、孤独のままに殺し、それでも彼女に手を差し伸べるのできかつた作者自身のお詫びも *Requiem for A Nun* のタイトルには込められているはずである。

## 注

- 1 厳密には、姪ではなく甥の娘であるが、血がつながっているという点が強調

されている。

- 2 Eustace は片足が不自由であり、それゆえ周囲に応援されのし上がっていった一方で、苦学しながら大学を卒業したはずが、実はいかさまポーカーで金を巻き上げていたことなどが語り手によって語られている。共同体との関係における彼の語られ方は、*Light in August* における Percy Grimm のそれと似ている。
- 3 ここには、Temple の夫 Gowan も潜んでいる。寝取られ男が身を隠して妻が自らの情事について話すのを聞き、苦しんでいることを考えると、サディスティックな喜びが Gavin の身体を貫いたかもしれない。
- 4 同様の理由で、テンプルは子どもを殺された悲劇の母親像を封印していく。Temple の赤ん坊が殺されたことはこの小説のプロットを展開させる重要な出来事であるが、被害者である赤ん坊の名前は一度も小説中に登場しない。一方で、もう一人の子どもである息子の名前は Bucky として頻繁に登場する——本人が舞台上に現れたり、話したりすることはないにもかかわらず。このような不自然なことが起こっているのも、Temple が Gavin の聞きたいことだけを話しているからである。Bucky には、Temple とかつての愛人 Red との間にできた子どもかもしれないという、Gavin にとって心躍らせる可能性があり、Bucky という名前は隠微な秘密の扉を叩く音のようなものだ。それに比べて、明らかに夫との間にできた赤ん坊の死は彼の知りたい「真実」には重要ではないのである。
- 5 Moreland は *Requiem* に登場する三人の女性について、歴史を三段階に分けたときに女性が担う文化的役割としてそれぞれを代表する人物として Nancy を「魔法使い」、Temple を「ヒステリック」、Cecilia Farmer を「エクリチュール・フェミニンの書き手」と定義している。ただし Temple は、Gavin もしくは共同体の男たちが予想する女性像をさまざまに使い分けており、ヒステリカルなだけではない。
- 6 その意味で、Nancy は『創世記』のアブラハムがイサクを神のいけにえに差し出したように、Nancy は Temple の代わりに赤ん坊を殺しているともできる。
- 7 *Faulkner at University* で、Nun について Faulkner は次のように答えている：

それでも、まだ、すくいきれない…… *Requiem for a Nun*

That was – it was paradoxical, the use of the word *Nun* for her, but I – but to me that added something to her tragedy. (*University* 196)

### 【引用文献】

- Faulkner, William. *Light in August*. 1932. New York: Vintage, 1990.
- . *Faulkner in the University*. 1959. Ed. Fredrick Gwynn and Joseph Blotner. Charlottesville: U of Virginia P, 1995.
- . *Requiem for A Nun*. 1950. New York, Vintage Books, 1975.
- . *Sanctuary*. 1931. New York: Vintage, 1993.
- . *The Sound and the Fury*. The Corrected Text. New York; Vintage International, 1984.
- Fujihira, Ikuko. “The Theater for Forgotten Scenes in *Requiem for a Nun*,” *History and Memory in Faulkner’s Novels*, Ed. Ikuko Fujihira, Noel Polk, Hisao Tanaka. Shohakusha, 2005, 246-269.
- Hormans, Margaret. “‘Her Very Own Howell’: The Ambiguities of Representation in Recent Women’s Fiction.” *Sign* 9 (1983): 186-205.
- Moreland, Richard C. *Faulkner and Modernism: Rereading and Rewriting*. U of Wisconsin P, 1990.
- Polk, Noel. *Faulkner’s Requiem for a Nun: A Critical Study*, Bloomington, Indiana UP, 1981.
- Reames, Kelly Lynch. “‘All That Matters Is That I Wrote the Letters’: Discourse, Discipline, and Difference in *Requiem for A Nun*,” *William Faulkner Six Decades of Criticism*. Ed. Linda Wagner-Martin. East Lansing: Michigan State UP, 2002. 127-152.
- Roberts, Diane. *Faulkner and Southern Womanhood*. U of Georgia P, 1994.
- Ruppersburg, Hugh Michael. “The Narrative Structure of Faulkner’s *Requiem for a Nun*,” *Mississippi Quarterly* 31 (Summer 1978): 387-406.
- バタイユ、ジョルジュ 『眼球譚』 生田耕作訳、二見書房、1971.